

日本女子体育大学附属二階堂高等学校

第七十四回 卒業証書授与式

式 辞 (抜粋)

厳しい冬を越え、希望に満ちた、春の訪れを実感できる季節を迎えました。

本日は、第七十四回卒業証書授与式を、ご来賓の方々、保護者の皆様のご臨席を賜り挙行できますことは、本校にとってこの上ない慶びであり、高段からではございますが、心より感謝申し上げます。また、保護者の皆様におかれましては、手塩にかけ育てこられたお子様が、高等学校の全課程を修了し、卒業となる今日の佳き日を、万感の思いで迎えられたことと、存じます。本校の、教職員を代表し心からお祝いを申し上げます。

さて、卒業証書を授与された卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは本日をもって、本校での生活にピリオードを打ち、新たなステージに踏み出そうとしていますが、これまでの3年間に及ぶ高校生活は、どのようなものだったのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症は、2020年1月、国内で初めて感染が確認され、全国に拡散していきます。くしくも、中学校の卒業を目前に控えた、3月2日には、すべての学校に臨時休校が要請されました。さらに、4月7日の緊急事態宣言の発出により、9日に予定されていた、本校の入学式は中止となってしまいます。その後は、登校できない期間が2ヶ月にも及び、まさに不便で不自由な、そして、不安な日々を余儀なくされてしまいます。

それでも、登校が再開した6月1日には、全教職員により、この体育館で皆さんの入学を祝いました。その中で、私はコロナに屈することなく、同じ仲間としてお互いを尊重し勉学や諸活動に励み、充実した3年間を過ごしてほしい。と話したことを、今でも鮮明に覚えています。

光陰矢の如し。あれから3年の月日が流れましたが、未だにコロナは収束しておりません。本校は、この間、教育を止めることなく、学力や教養の定着を目指し、授業を続けてきました。しかし、学びを深化させ、課題発見・解決に必要な、思考・判断・表現力を視野に入れ、掘り下げた学習活動は、少し不十分だったことは否めません。

また、仲間との交流や、豊かな人間性を育む対面での行事は、縮小や中止に追い込まれましたが、今年度の体育祭や二階堂祭、ダンス発表会は、実施が可能となり、思い出のページに書き加えられました。部活動も感染防止を優先させ、さまざまな規制が続くなか、これまでの伝統を受け継ぎ、納得できる結果に至ったことは、称賛に値します。

このような、誰もが経験したことがない、過酷な条件下に置かれた高校生活でしたが、

皆さんは常に前を向き、自らの希望や夢の実現に向け努力を惜しむことなく着実に成長を繰り返してきました。本日、中等教育の全課程を修了し、責任と自覚を兼ね備えた成人として、より広い世界へと飛躍の時を迎えました。

そこで、卒業の門出にあたり、三つのメッセージを贈ります。

(前略)最後の三つ目は、日本女子体育大学の前身である、二階堂体操塾の卒業生である、人見絹枝についてです。人見絹枝は今から約95年前の1928年に開催された、第9回・アムステルダムオリンピックに、我国では女性選手として、初めての参加を果たし、陸上競技800メートルにおいて、銀メダルを獲得しています。一人の女性として、スポーツに専念できる環境が、まだまだ整備されていない社会の中で修練を積み上げ、女性初のメダリストとなり、大いに注目されました。その後の自伝には、「愚かなりとも、努力を続ける者が、最後の勝利者になる」と書きしるしています。できない事を嘆いたり、周囲のせいにする事なく、常に自己肯定感を高め、挑戦することの大切さを私たちに身を持って教示しています。

大学・高校・幼稚園・そして保育園を有する学校法人二階堂学園は、記念すべき創立100周年を迎えました。100年の伝統と未来を見据え、さらなる発展と進化を目指します。

結びになりますが、本日ご臨席頂きました、ご来賓・保護者の皆様には、今日まで本校の教育活動に、多大なるご理解とご支援を賜り、感謝の念に堪えません。今後も引き続き、お力添えくださいますようお願い申し上げます。

それでは、卒業生の前途に、幸多きことを心より祈念し、校長式辞といたします。

令和5年3月5日

日本女子体育大学附属二階堂高等学校

校長 工藤公彦